

研究ノート 幼児期における漢字習得試論 : その可能性と方法

著者	大橋 修一
雑誌名	川口短大紀要
巻	34
ページ	127-137
発行年	2020-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001299/



幼児期における漢字習得試論

— その可能性と方法 —

大 橋 修 一

幼児教育に漢字習得方法その可能性試論

教育実習の巡回をしていると、子どもたちのさまざまな遊びに遭遇する。その一つにラクガキがある。大きなロール紙に数人ずつがグループとなり、クレヨンで思い思いになぐり書き（スクリブル）している現場に出くわしたり、(図1) また靴箱に漢字で自分の名前が貼り付けてあり、三歳、四歳児も名前を漢字で書けるようにしています、という園もあった。「子どもにとって漢字は難しく感じていませんか」との問にも「むしろ仮名文字は曲線が多く、漢字のほうが視覚的には覚えやすいようです」との現場の声を聞いたりしたのである。筆者の想像とは別に子どもたちにとっては、漢字を書くのは本来、面白いことなのである。ここで述べる子どもの漢字習得方法の可能性も、まずこうした園の先生方の試みに触発されたものであることをはじめに記しておきたい。そもそも子どもたちにとって、漢字の祖型の多くは象形文字という視覚的にも認識しやすい絵文字から発生しているだけに、描画を描くこととは親類のような関係にあるといえよう。したがってその点、子どもが描写する感覚は絵を描くことも漢字を書くことも幼児期においては同質なものと考えられる。

年齢別による描写内容

ところで、子どもの描写といっても年齢によってその描く内容も異なるようで、この点は認識しておかねばなるまい。描写についての最初の研究は、フランスのリュケが1927年に公刊した「子どもの絵 (Lesdessin enfantin)」とされている。それによると描写の発達はだまかに、(A) なぐりがき期 (一～二歳頃)、(B) 図式画期 (三～七歳頃)、(C) 写実画期 (七歳以後) に分けることができるという。その特徴を簡単に述べてみよう。まず (A) のなぐりがき期において、六～七ヶ月くらいになると「おすわり」ができるようになり、手が自由に使えるようになる。するとクレヨンやペンなどを手に持って打ち付けるような点や線を描くようになるという。さらに

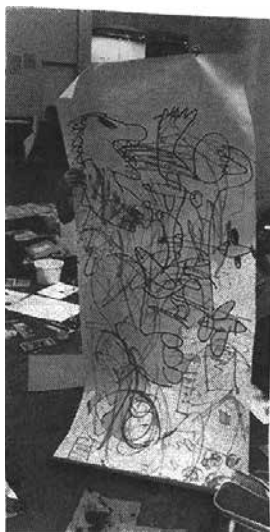


図1



図2

左 (A) なぐりがき期 テーブルに頭をぶつけた後で描いて太过于荒い線描
 右 (B) 図式画期 母親について描いたと思われる丸くて柔らかい線描

(Rollo, Longobardi, Spataro, & Sulla, 2017)

『ラクガキのススメ』（あいり出版）より転写

一歳ころになると、タテ線やヨコ線、波線、ぐるぐるの渦巻き線などを描いたりするようになる。このなぐりがきの段階では、線をかきなぐっているだけで、まだ何か具体的な対象を描いているようには見えない。実際に保育園での園児たちの描く様子を見ていても単なる運動であったり、手足を動かす興味によって生じる活動のようにしか見えない。しかし、最近の研究によると、なぐりがきそのものについて、子ども自身が意図や感情を伝えるためのツールであると再評価しはじめたとの論文もある。発達心理学の清水由紀教授の引用によると（Longobardi, & lotti, 2015）生後一八ヶ月目の男児が、テーブルの角に頭をぶつけた後で、（図2）のような線を描いた。これはおそらくテーブルにぶつかったという行為のイメージを線で表現したのではないか、その証拠にこの男児はいつもこのような力強く荒っぽい線を描くわけではない。母親とのやりとりの後では、母親と思われる丸くてやわらかい線描を描いていた、という論文を紹介し、今後、内面を言葉で表すことができない子どもの行動やしぐさ、描くラクガキそのもので、これらの行動のヒントが得られることを示唆していると紹介している。（B）図式画期（二歳～七歳頃）になると、なぐりがきのあと、周囲から大人が見ても何らかの形を表していると、はっきり認識できる描写が見られるという。「プープーを描く」と宣言して描くような場面も見られ、何か特定の対象を表した絵という意味で、象徴的描画（symbolic drawing）とも呼ばれる。象徴機能とは、思考やイメージを介してシンボルと指示物との関係を間接的に表す働きのことである。この「プープー」の例は、子どもが車のイメージを頭の中に思い浮かべることができるからこそ、象徴的描画を描くことができるわけである。図式画期の子どもたちは、この象徴的描画方法を身

につけており、たとえばスカートの形は三角形だったり、家は四角形に描いたりイメージができているからこそ図式的に絵が描けるわけである。次の(C)写実画期(八歳頃以降)になると、対象や世界を客観的、分析的に認識する能力が発達するという。例えば対象を一定の視点から人の眼に映るのと同じように描く写実画が描かれ、さらに近くのは大きく、遠くのは小さく、遠近画法を用いることも可能になるというのである。これらおおよその発達段階における特徴を清水氏は想像力という視点から次のように分類する。(A)なぐりがき期の子どもは型にはまっただけで、大人には決して真似ができない独特の世界を作り上げることができる。しかし、(B)画式画期になると、スカートは三角形、お月さまは丸、女の子にはリボンをつける、いわゆる決められた型が生まれ、想像力という視点がうすれて少し停滞。(C)写実期になると、自分の身の思いを絵に載せることができるようになり、柔軟的発達が絵に表れてくる、と分析する。

中国の古代文字と幼児の描画の接点

実は中国の漢字も、もともと象形から始まったのであり、幼児のなぐりがきとは描写とする点では同じ根でつながっているのである。少し中国の漢字の祖型と考えられる資料を紹介してみよう。中国においては、新石器時代から現代に至るまで数多くの「^{へきしよ}壁書」が書かれてきた。建物や洞窟の壁に描かれたものを壁画と呼ぶ。一方、壁などに書かれたものを中国では壁書といっている。また、陶器や土器の破片、もしくは板、骨などの素材を異にする壁面(レリーフ)に墨書されたり、あるいは刻まれたりしたものも、大きな意味で壁書といっていよい。古から現代に至るまで縷々として人間のさまざまな営為の中から生まれた壁書。時に政教の手段として書かれたもの、もしくは気分の赴くままに即興的に描かれたものと、その内容は実に多岐に亘っている。しかし、その一本一本の線を時空を超えてながめてみると、書かれた内容は別としても、精気に溢れた書きぶりは、現代の私たちの魂をゆさぶる根源的な力を持っている。おそらく、それは各時代の書き手たちが、一瞬の間に一本の線を描くことに意識を集中させ、自己自身のなにかを投影させようとした結果、線であるという事実を超えて一種の「美しさ」を放ったからだろう。書き手の意識次第で平凡な単なる一本の線にもなれば、見る側の心の中に未だ覚醒されていない「美しさ」を激しく揺り動かす力にもなりえる。これらの意識においては、壁書も今日の子どもたちが画くラクガキにおいても本質的には同じ性格を備えているといっていよい。ここでは、ひとまず長い歴史の中から生み出された、壁書の痕跡を見てみよう。

(図3)は中国山東省章丘龍山鎮の城子崖で発見された「刻符」である。前2500から前2000

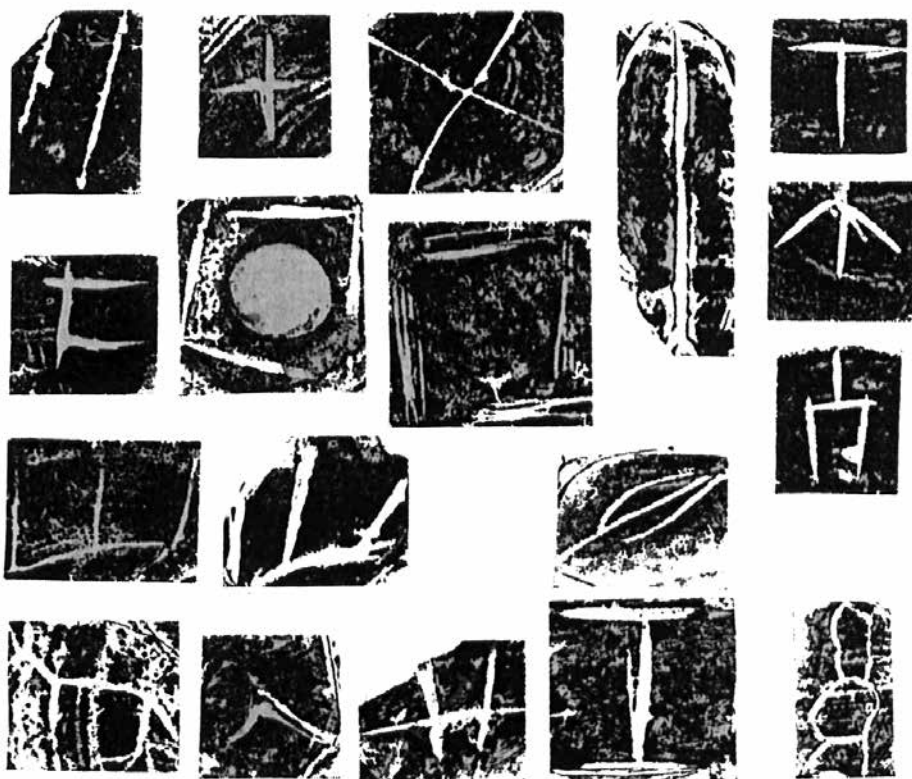


図3

頃の遺物と推定される。刻符というのは、刻まれた符号という意味である。ちなみにカメの甲羅や獣骨に刻まれた最古の文字を「甲骨文字」と読んでいる。これが文字と規定できるのは、文章として成立している、つまり主語と述語が明確に存在しているからであって、単独で「山」や「川」に似ているだけでは文字とは認定できない。しかしながら、人はことばの代替として、この符号を思いつき、それを定着させようとしたのが、この刻符によっても見出すことができよう。刻調はきわめて直線的で、配置の明快さが美しく保たれている。幾何学的な堅苦しい印象もまるで、幼児が家の壁になぐり書き（スクリブル）でもしているような風景が浮かんでくる。

(図4)には、図1と時代も同じ。山東省鄒平県丁公村から出土した陶片である。出土地の村の名前から「丁公陶片（前2500～2000年）」と呼ばれている。この底辺部に11文字を左から右に線刻している。上辺は7.7センチ、下辺は4.6センチ、幅は3.2センチ。内容については「漢字の祖型」という人もいれば、「文字に直結する可能性はなく、別の系統の刻字である」という人もいるなど、いまだ定説をみない。線と線が絡み合い、やがて線が閉じて円状になり形があらわれる。そうした造字意識とよばれるものが働いているようで、子どものラクガキとも共通す

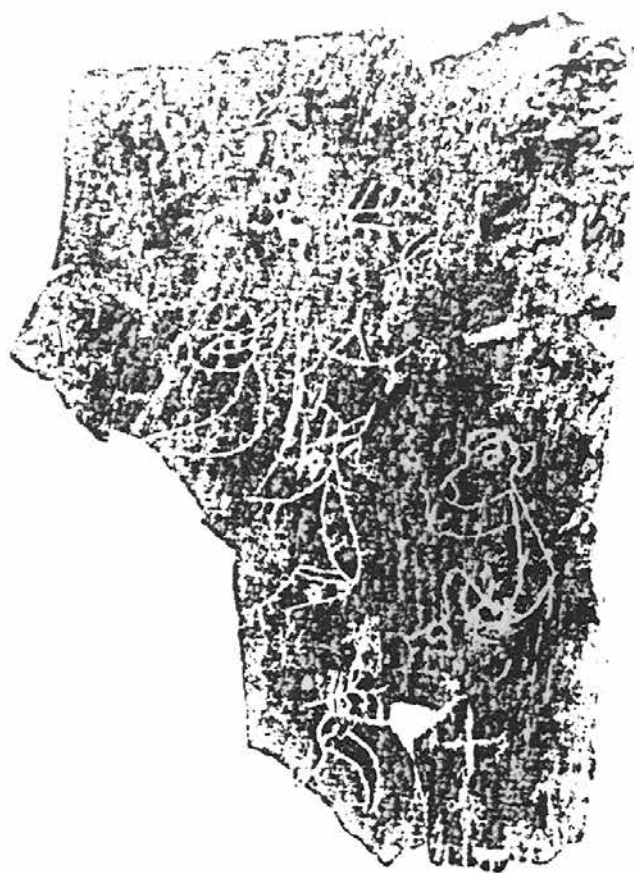


図4.

る。こうした久しい蓄積がいわば凝縮され、一気に文字としての表現を求め、漢字の成立を促したことは間違いないのである。

(図5)は甲骨文字(前1300~前1100年頃)に描かれた壁書である。そもそも甲骨文字は、人が人に意思や感情を伝える、という次元のものではなく、「神と対話する、あるいは神に直接向かうものとして生まれたもの」である。つまり古代のエジプトのヒエログリフと同様、神聖文字として誕生した。また、中国のこうした文字のあらわれ方の歴史を挙げてみると、周時代の「金文」、秦代「篆書」、漢の「隸書」や「草書」、または「楷書」などは甲骨文字と共通の一つの基本型をなしている。これは、甲骨文字の誕生そのものが、神聖文字から出発したと無縁ではない。さて、甲骨の場合、骨に鋭利な刃物で刻むので、本来美しい曲線のカーブを描くところも、エッジを利かせたかのようなゴツゴツとした線条となっている。ある学者は、甲骨文字の直線的な書体を「契刻体」と読んだり、次の周時代の青銅器に鑄込まれた曲線を帯びた書体を「筆写体」と読んだりしている。ともかく甲骨は素材によって、その線条が変化する、その代表格とってよい。さて、甲骨文字の中であって、ここまで絵画的要素を加味した甲骨は珍しい。解釈も一定しない。ラクガキとも絵文字ともつかぬ、この天真爛漫さ、そもそもが神聖文字であった多量の甲骨文字の中であって、一つだけ神聖の開放をうながす絵文字が存在するこの不思議さ、それがかえって甲骨文字を面白くしていると思うし、子どもの世界とも通じているように思われる。

(図6)は、「^{けいとせん}刑徒磚」と呼ばれている。後漢時代の遺物で103年から125年のものと推定される。「刑徒」とは「処刑された人」、あるいは「納税の代償として労役中に亡くなられた人たち」のことである。「磚」とは「瓦」の意味。つまり、「刑徒磚」とは瓦の破片に刻まれた墓誌を意味する。泥をこね、乾く前の軟らかなうちに竹べらか、木片で死者の亡くなった期日や出身地、及び名前が無作為に刻まれている。当時の無名の役人が事務的に、しかも下書きもなく刻みつけた



摹本(原寸)

图 5

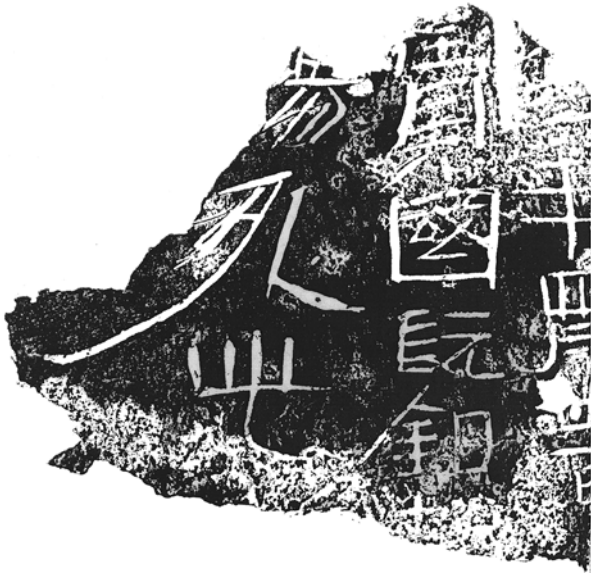


図6



図7

ことが想像される。しかし、それがかえって当時の息づかいが、屈託のない暢やかな美しい線質となっている。これも子どもの描く世界と根は全く同じと思われる。

このラクガキのような墨書（図7）は、後漢時代（250～220年）に簡牘かんとくと呼ばれるもので、公文書や手紙に使用された木片に書かれている。中国において紙に文章や手紙が一般的に書かれるようになったのは、四世紀頃からである。それまでの書写の材料は竹や木、それに帛（絹）などに書かれたものである。この簡牘は幼児が文字の手習い用に書いたものと思われる。文字の手習い用に書かれた簡牘はこれまでも出土していて、別に「習字簡」とも呼ばれている。よく見ると、幼児の筆の扱いは不慣れであるが、線の肥瘦、強弱、曲線や直線を表現するのにくり返し挑戦を試みているようである。ここには何の屈託もないし、自発的な衝動に身をまかせて、内なる世界を必死に表現しているようにも感じられる。「幼児の本能的なぐり書き」は、現代も古代においても変わりはない。

以上、古代の文字と幼児のラクガキの間には一定の共通性が見られるように思われる。認知科学者の野村亮太氏によれば（「ラクガキの認知科学・試論」）、人間の子どもは人物の顔なら顔、山なら山、川なら川という一定のイメージを頭の中に描き、その見立てに基づいて描くのだと言う。目の前にはないが頭の中にある、いわゆる表象を紙の上に表現しているというのである。目の前にはない人の顔の笑いや、やさしさを思い浮かべて顔の形を描く。また山の険しさや、そびえ

たつ岩肌を思い浮かべながら山の形容を描く、またさらに川の流れや、ひんやりとした感触を思い出しながら、川の形容を目の前に表現する。このように考えると、おそらく漢字の祖型に対する先人の考え方も同じ認知方法から生まれてきたものではないか。野村氏はさらに、人間ならではの心の動きが関与しているのだというのである。それは“触発”だというのである。例えば子どもたちは初めから完成形を考えて描くわけではない。描き進めていく内に、さらに何かを描きたいかを感じとって描き進めていく。つまりは自分が描いた絵に触発されて、また新しい想像力が刺激を受けて、次のラクガキを描くことへと突き動かす、というのである。この野村氏の発言も、漢字が古代文字から現在使用している楷書へと生成した過程も、同じ根でつながっているように思われる。そこで、これからの共通した認識を基に、幼児の漢字習得の方法について考えてみたい。

幼児期の漢字習得の方法試論

そもそもこれまでの漢字学習は、ともすれば暗記するばかりを重視する指導になりがちであったように思われる。今一度、児童一人一人が言葉の使い手として適切に表現し、正確に理解する能力を育てるという視点から、漢字指導の在り方を考える必要があるようである。そこで幼児期から成長の段階を踏みながら、漢字の成り立ち、古代人の生活、文化などを想像させること、また現代の生活や文化が古代と密接につながっていることを実践させることが必要なことかもしれない。ところでこの取り組みを小学校から導入して立派な成果を修めている県がある。福井教育委員会である。郷土出身の古文字学博士の白川静氏の理論をもとに小学校一年生から六年生まで「白川文字学」を活用した独自のカリキュラムがある。またそれに準拠した副読本「白川静博士に学ぶ、楽しい漢字学習」といった本が教育委員会から発行されているのである。この試論も、白川氏の漢字学習方法を参考に進めたものである。ここでは幼児期の発達段階を踏まえて行いが、これは先述したリュケの理論を参考にしたものである。それでは(A)なぐりがき期(一〜二歳頃)にはどのような手立てがあるであろうか。これは(B)図式画期(三〜七歳頃)、(C)写実画期(七歳以降)の学習を念頭に置いて進めてみる。まずは「おすわり」が完全にできる状態から始めたい。

養育者が絵本の読み聞かせを積極的に行うことは、大切であろう。絵本の中の登場する動物、自然界の「太陽」「お月さん」「山」や「川」など、あるいは「列車」や「車」など指しながら物の名前を伝える。くりかえしが重要である。とりわけ気にいった絵本は自分で指さし求める傾向がある。また「おすわり」の状態で、手が自由に使えるようになり、手指の制御能力もついてくるので、クレヨンなどもたせるとよいだろう。ロール紙や新聞紙を用意し、その上に思い思いに

書かせる。始めは打ちつけるような点や線を描くであろう。手を動かすことへの興味であったり、紙とクレヨンの筆触を楽しんだりと自由な活動にまかせたい。一歳頃になると今度はタテ線、ヨコ線、波線、渦巻き線を描くようになる。こうなると、なぐりがきの中に、自身の意図や感情を伝えるツールとして描かれる場合も出てくるので、注意深く観察することも重要である。同時に養育者の働きかけも大切になってくる。「何を描いていたの?」「わんちゃんかな?」といった意味づけをするといった社会的相互作用を通して「何かの意図に基づいて描く」ということも幼児は学ぶわけである。(B) 図式画期(三歳~七歳頃)、この時期には幼児が何を描いているのか判別できるようになっている。「お父さんを描く」とか、「友達のK君を描く」と宣言して描くようになる。つまり象徴的描法を身につけているのである。このように頭の中にイメージを思い浮かべ、特に印象の強い断片が表象(イメージ)の材料として取り出せるわけである。例えば、お父さんはヒゲをたくさん蓄えているので、そこも描く。友達のK君は目がギョロリとしているのでそこも描くといった、強い断片が頭の中にあるわけである。これをことばや、身体、描画などの手段を使って目に見える形へと表現することになる。この象徴的描法をこの時期の漢字学習にも取り入れたいのである。幸いに漢字の概形は、幼児のものの概形のとらえ方も似たところがある。幼児が仮名文字より直線的な漢字の方が覚えやすいのは、その為であるだろう。まずカテゴリーごとに日頃馴染みの漢字を分類してみよう。

- (1) 自然界の姿をイメージさせるもの。具体的には「月」「山」「川」「木」「雨」「太陽」など。
- (2) 人間の体の一部をイメージさせるもの。「目」「耳」「首」「手」「足」など。
- (3) 動物をイメージさせるもの「馬」「牛」「羊」「亀」「犬」など。

以上、象形文字から作られた文字を選び列挙したものである。ちなみに「楽しい漢字学習」——もののかたちから漢字を見つけよう——とあるが、この本の中には、

(図8) すべて象形文字が使用されている。小学校では、子どもたちにとってはすでに「山」や「川」「雨」「犬」「田」などの漢字は既習されているのである。したがってこの場合、今、習っている楷書の漢字の原初形は、この象形文字が原型だったことに気づくわけである。では幼児の学習においてはどうすべきであろうか、これは親しみやすい象形文字を数多く見せてあげることから始めるべきであろう。人間の身体の一部の姿を例にとってみよう。目については、まず自分の目を鏡で見ながら書かせてみよう。あるいは「養育者の目を書いてみて」とうながしてみよう。

(図9) ように書くであろう。あるいは、(図10) のように書くかもしれない。そこではじめて養育者は「目」という楷書の漢字を提示し、漢字では、このように「目」を書くんだよと補足

し、さらに四角の中の二本の線は、実は瞳の部分だったんだよね、と説明を加える。そこで幼児ははじめて自分の目の形が、よく目にする、目薬りの「目」であることを認識するわけである。「手」も同様に、まずは、自分の手をよく観察させることから始めよう。

おそらく、はじめは(図11)のように書くであろう。何度もくりかえしているうちに(図12)のような手になるかもしれない。そこではじめて「手」の楷書体を示し、おてての形から「手」ができていたんだね、と意味づけしてあげることが大切であろう。さらに、(3)動物をイメージさせるもの。これも「羊」や「牛」などの絵本を見せ、思い思いに描かせる。あるいはイメージとして書かせてもよいであろう。すでに、頭のイメージの中にあるかもしれない。

(図13)、(図14)など、角を強調させ、象徴的なものが書けるようになるとなおよいであろう。これが「羊」という漢字だよ。「上のちょんちょんとしたものは、実は角の形だったんだね」と意味づけすることも忘れてはならない。

「牛」も象形では(図15)の形をしている。上部も角の形である。何度も描くうちに角を意識させると、このような形が表われる。そこではじめて「牛」という感じ漢字を教える。角の形が片方だけ残した字形が「牛」なのである。こうした工夫が幼児の漢字学習の意欲をさらに引き出すことにはつながらないだろうか。象形文字でとらえる物の概形は幼児の描くらくがきの中にもいくつも点在していて、案外、幼児には興味あるものとして受け入れられるように思われる。最後に(C)写実画期(七歳以降)であるが、この時期は対象や世界を客観的、分析的に認識する能力が発達する。また異なるカテゴリーの組み合わせ(先程のカテゴリーでは、人間と動物を合体させる)など柔軟に変化させ思い切った変化も見られる。こうした特徴から、象形文字だけでなく、指示文字なども漢字の学習に組み込んでよいであろう。(図15)は手のひらの上に、しるしをつけて「上」という漢字ができたもの。(図16)は手のひらの下にしるしをつけて「下」の漢字ができたものである。必ずしも象形文字から楷書体にはなっていないが、この時期には象形とは違うカテゴリーからでも漢字はできるものと理解できるようになる。

また象形文字では「木」は(図17)であるが、「ねもと、もと」の意味を加えたために、しるし「・」をつけて「本」の漢字ができたのである。

これも象形文字だけでは説明がつきにくい、違うカテゴリーを組み合わせればそういう字もできるであろうことを理解する。こうして漢字の造字法(指示)もあり、さまざまな方法があることも学習させてもよいであろう。また会意という造字法もある。

「右」は古代文字では、(図18)と書き、右手で神様へのいのりのことばを書いた紙を入れる器を持っている形。手の形は五本から三本に省略してあるわけである。「左」は(図19)のように書き、左手で神様をよぶ道具をもっている形。基づくところは、神様との関係が深い文字で

あったことを意味づけしてあげるとよいであろう。

以上、リュケの理論に基づいて幼児の漢字教育の一環について述べた。こうした取り組みによってこそ、漢字の学習が、身近なものになるように考えられる。



図 8

『楽しい漢字学習』より転写
(福井教育委員会編)



図 9

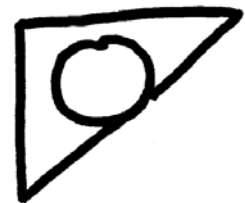


図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18



図 19

